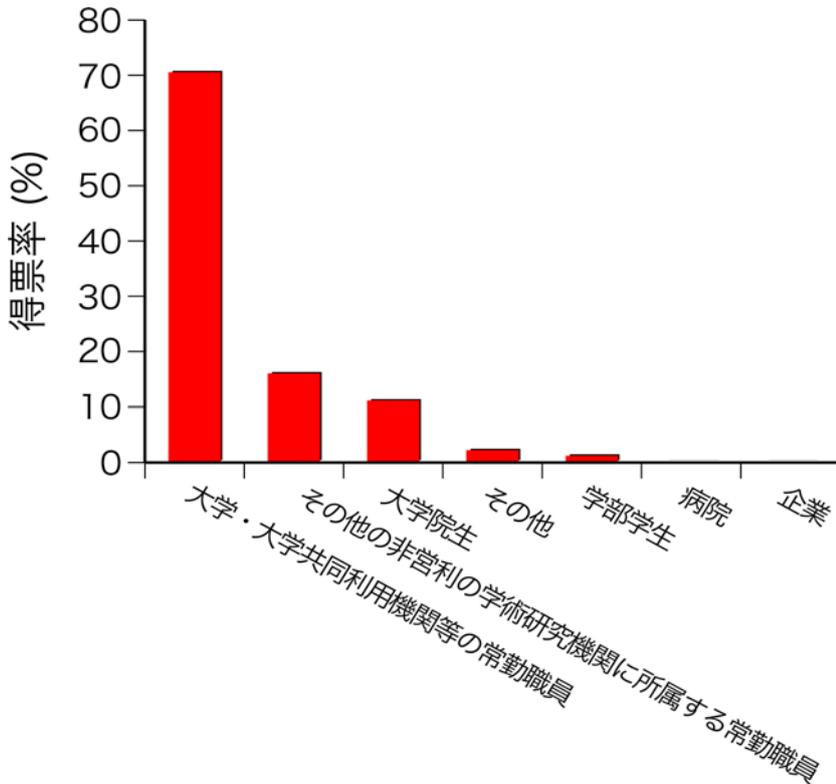


2012 年度包括脳ネットワーク・ワークショップアンケート

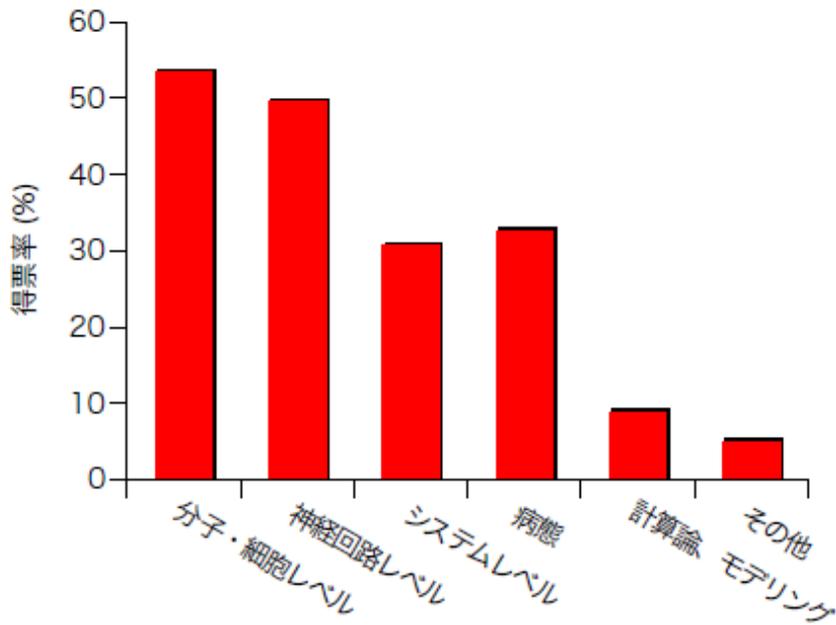
質問 1：あなたの所属を教えてください。



質問 2：質問 1 でその他とお答えいただいた方は、所属の種類をお答え下さい。

立命館大学、北海道大学、独立行政法人研究所、東京大学大学院 新領域創成科学研究科、
東京大学、大学院医学研究科、大学医学部、助教、自然科学研究機構 生理学研究所、国立大
学法人医学系研究科、研究員、技術員、学振・PD、医学部講師、医学部基礎系、医学系研究科

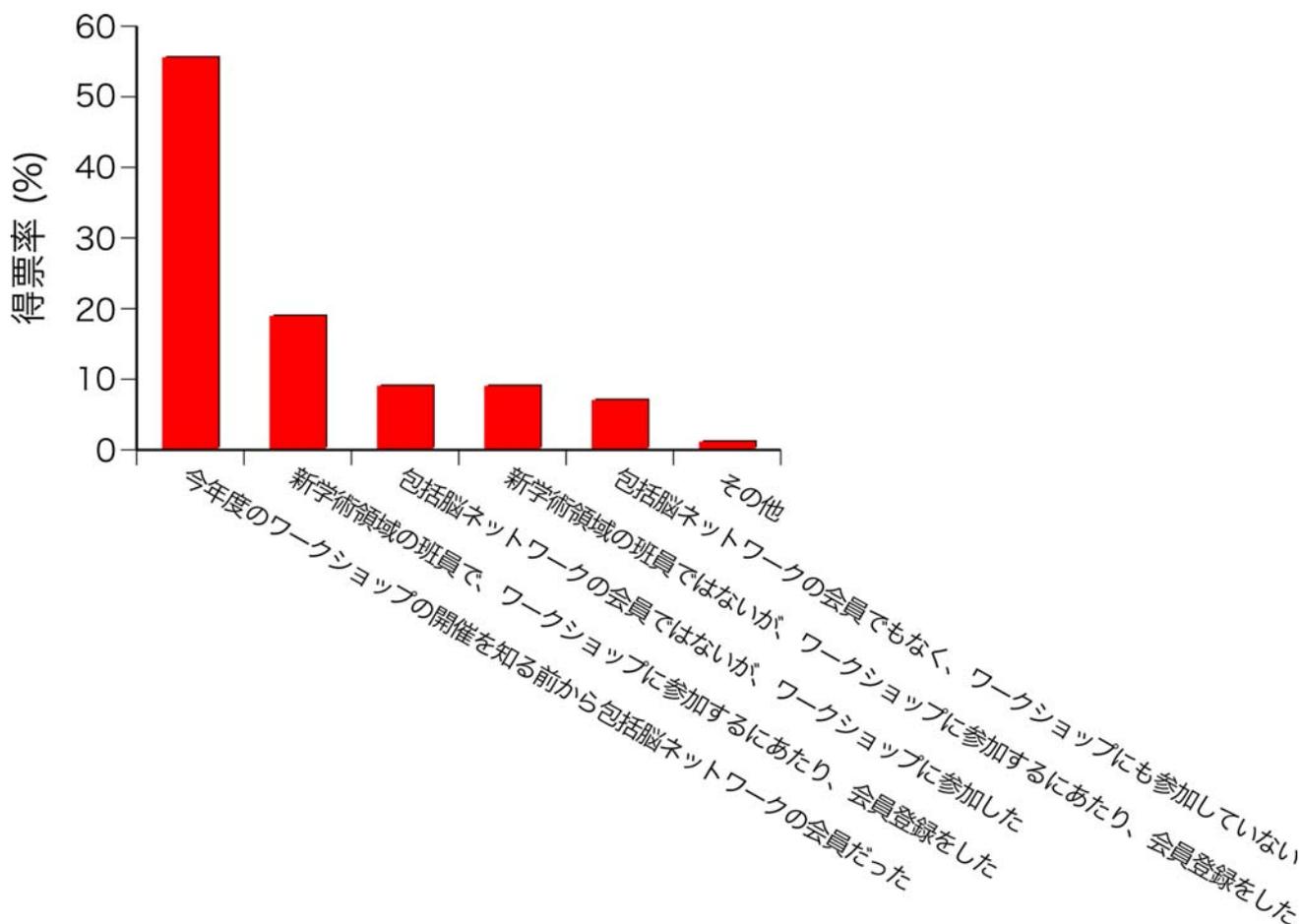
質問3：あなたは現在脳研究のどの分野に関わっていますか（複数回答可）。



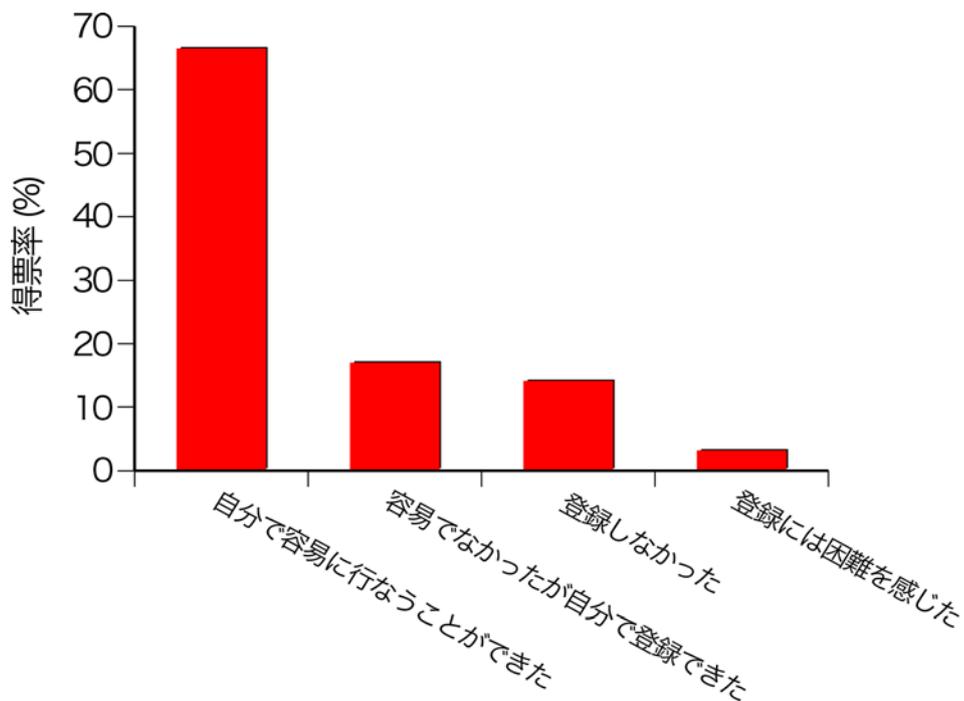
質問4：質問3でその他とお答えいただいた方は、分野をお答え下さい。

大脳皮質の神経回路、神経糖鎖生物学、神経行動学、イメージング
神経回路の生後発達における分子メカニズム、行動解析、画像解析

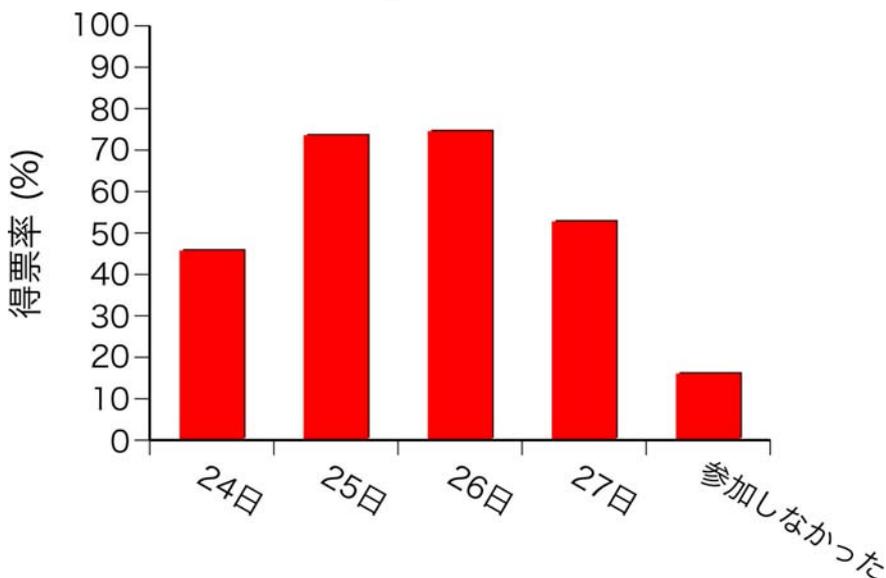
質問5：包括脳ネットワークへの会員登録についてお答え下さい。



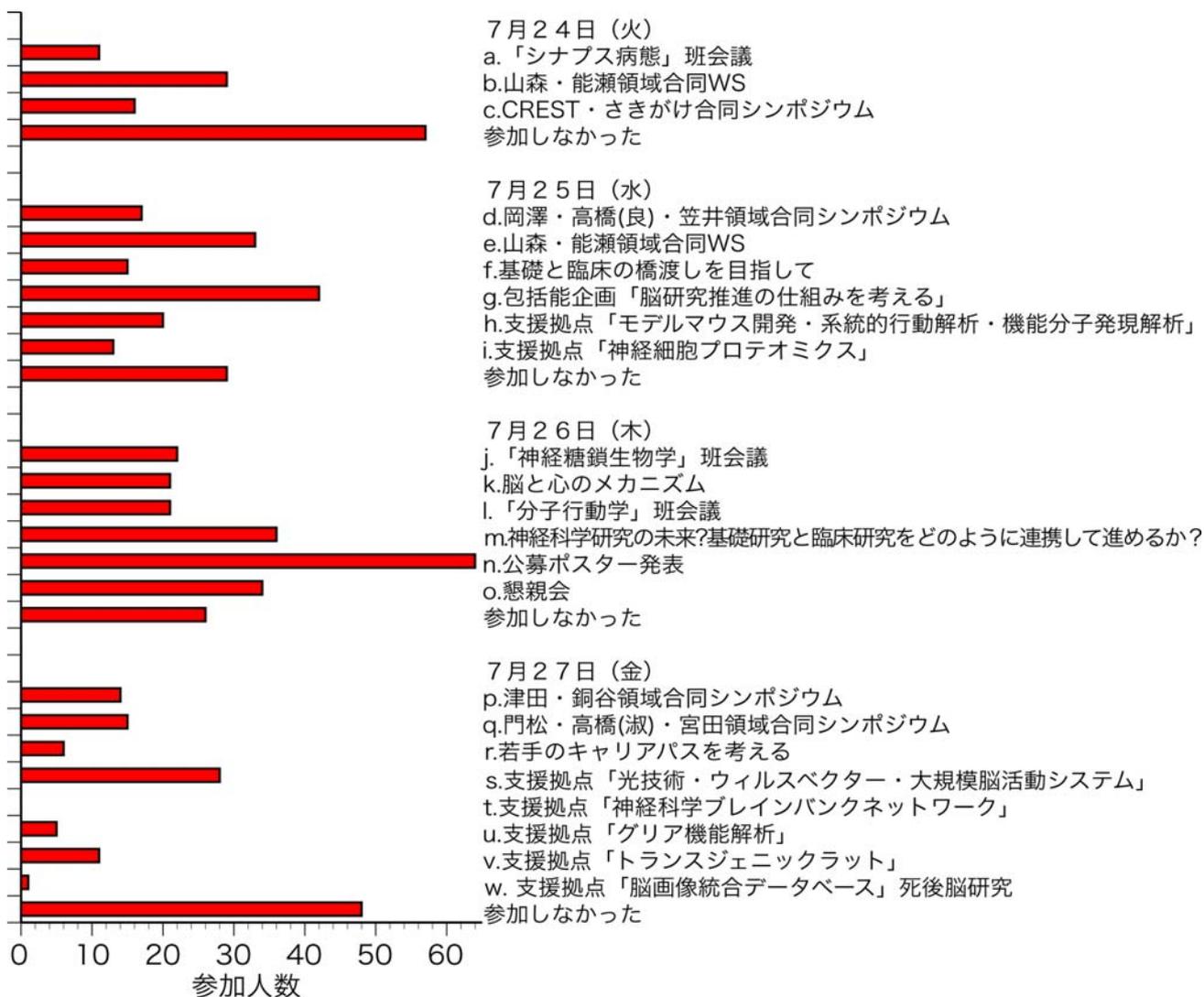
質問6：ワークショップの参加登録は容易に行えましたか？



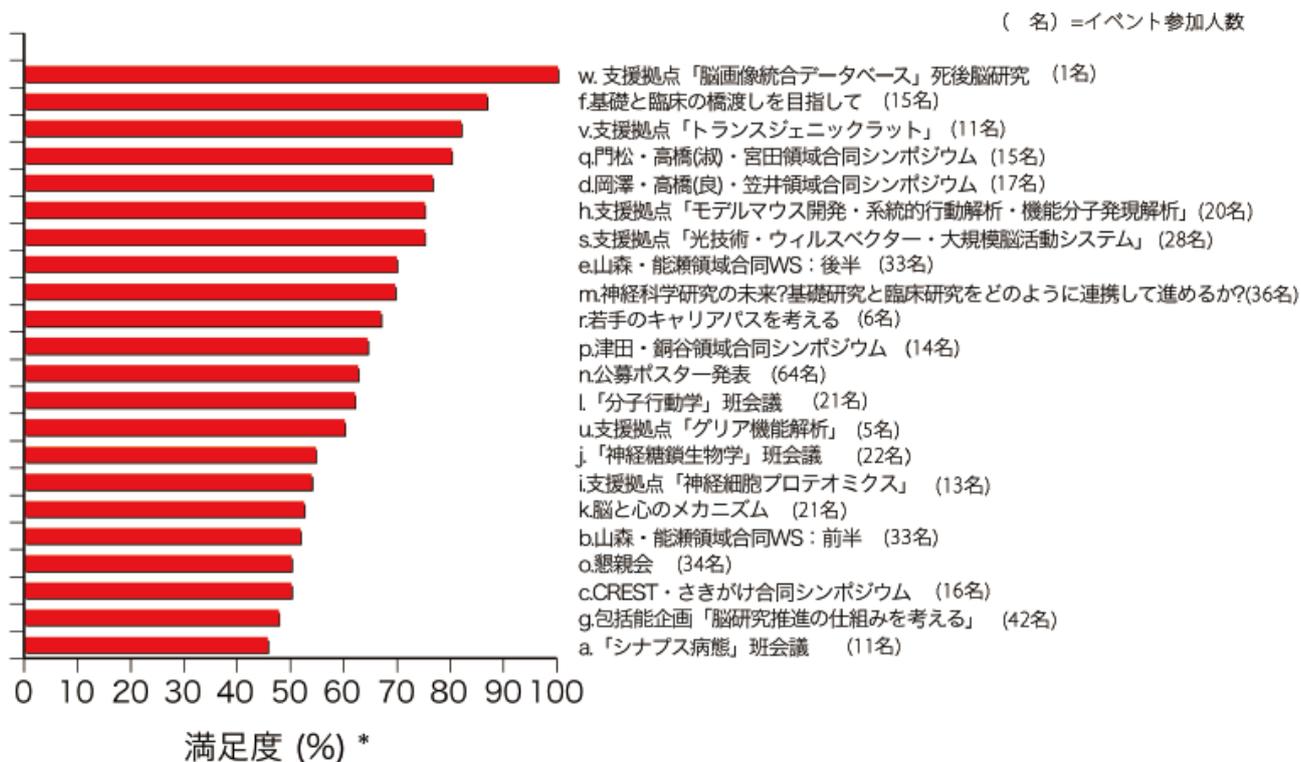
質問7：実際に参加した日程をお教えてください（複数回答可）。



質問8～11：どのイベントに実際に参加しましたか



質問 12 : 有意義と思われたイベントはどれでしたか。質問 8~質問 11 の選択肢のアルファベットでお答え下さい (複数回答可)。



* 満足度=(有意義と思った人数)/(イベント参加人数)x100

質問 13 : 質問 12 で有意義と思われたものの理由を a-w の記号を記した上で簡単にお願いします。

a. 「シナプス病態」(岡澤領域) 班会議

- 未開拓分野がまだ多く残されていることを実感できた。
- 自分の知らない分野の報告から新しいことを学ぶことができた
- 自分の研究分野だから

b. 大脳新皮質構築」「メゾ神経回路」合同ワークショップ」(山森・能瀬領域)

- 全てにおいて有意義な情報交換ができたので。
- 「大脳新皮質構築」と「メゾ神経回路」の合同だったので、幅広い内容の発表を聞いて良かった。
- 新たな知見が得られた。研究内容に関して意見をいただけた。

d. 「シナプス病態」「脳内環境」「自己制御精神」 脳疾患関連 3 領域合同シンポジウム (岡澤・高橋(良)・笠井領域)

- 演者の選択が工夫されており、必要としている情報が入手できた。
- 支援の具体的な内容が分かった。

- 共に自分の知らない分野の報告から新しいことを学ぶことができた。
- 自分の研究分野だから

e. 「大脳新皮質構築」「メゾ神経回路」合同ワークショップ（山森・能瀬領域）

- 自分の研究にダイレクトに活かせる話を聞いたので
- 全てにおいて有意義な情報交換ができたので。
- 「大脳新皮質構築」と「メゾ神経回路」の合同だったので、幅広い内容の発表を聞いて良かった。
- 新たな知見が得られた。研究内容に関して意見をいただいた。
- 自分に経験のない技術を学べた

f. 精神医学と脳科学のコラボレーション：基礎と臨床の橋渡しを目指して

- 演者の選択が工夫されており、必要としている情報が入手できた。
- 自分の研究分野だから

g. 包括脳企画「脳研究推進の仕組みを考える」

- 日本の脳研究の枠組みと現状を知る上で必須。
- 推進の過程がよくわかった
- 発表内容の構成が良かった。
- 今後の脳科学の方向性を知ることができた

h. リソース・技術開発支援拠点「モデルマウス開発・系統的行動解析・機能分子発現解析」連携チュートリアル

- 普段接していない研究課題に対する技術的なアプローチを紹介して頂けたことで新しい研究の可能性についてより具体的に考えることが出来た。
- 各支援の実際がよくわかり、支援を受けたくなくなった
- リソースの具体的な利用法がよくわかった
- チュートリアルはいずれも教育的な内容で意義深かった。
- 技術・支援内容の情報が得られた。
- 演者の選択が工夫されており、必要としている情報が入手できた。

i. リソース・技術開発支援拠点「神経細胞プロテオミクス」チュートリアル

- 普段の学会ではない実験方法などの苦勞、困難なところなどを詳しい解説があったので非常にためになった。
- 演者の選択が工夫されており、必要としている情報が入手できた。

j. 「神経糖鎖生物学」（門松領域）班会議

- 自分の研究分野
- 新たな視点を取り入れることができた。

l. 「分子行動学」(飯野領域)班会議

- どの講演者のデータも非常に興味深く、これからの結果が楽しみに思われたから

m. 包括脳・脳プロ合同企画 「神経科学研究の未来－基礎研究と臨床研究をどのように連携して進めるか？」

- 基礎と臨床の橋渡しについて、第一線でご活躍されている研究者の先生方のお考えを聞くことができたのでよかったです。
- resting state fMRI+Decoding+Neurofeedback という我が国オリジナルの手法が、精神疾患の診断・治療に貢献する可能性を示して頂き大いに士気が上がった。
- 丁寧に説明されていて勉強になった
- 今後の発展性に非常に期待を抱かせる内容の話聞いたので
- 神経科学研究の未来をコミュニティの多様なメンバーで議論する場は必要。

n. 公募ポスター発表

- 様々な分野のポスターが有り、異分野の考えを学び新しい実験などを考える機会となった。
- 普段なかなか知る機会のない研究と出会う良いきっかけとなったから
- ポスター発表における質疑応答で、重要な情報を得たため
- ポスターの中に面白い研究を見つける事ができ、有意義にディスカッションできた
- 精神病理の研究など、普段聞く機会がない人の話を聞くことができた。
- ポスター発表の内容が充実していた
- 参加者のレベルが高く、他の学会と比べ、楽しいディスカッションができた
- 和やかな雰囲気の中で発表する機会を得られたので
- 新しい研究の方向性を知る上で有意義
- 時間が短かったが、おもしろい発表を聞いた
- 普段の学会と変わらないくらいの活気に溢れていたから
- 全てにおいて有意義な情報交換ができたので。
- 十分な時間が設けられていたので、有意義なディスカッションができた。
- 新たな知見が得られた。研究内容に関して意見をいただいた。
- 直接ディスカッションできる部分がよい。

o. 懇親会

- 人的交流が活発であった
- 他分野の研究の話聞くことができ有意義だった
- 幅広く年上、年下の人々と、お酒を飲みつつお話ができる点
- 懇親会で交流ができた

p. 「伝達創成機構」「予測と意思決定」合同シンポジウム (津田・銅谷領域)

- 幅広い分野の発表者がいた

q. 「神経糖鎖生物学」「血管と神経」「動く細胞と秩序」 3領域合同シンポジウム（門松・高橋（淑）・宮田領域）

- 多角的な研究視点を学べた
- 内容がしっかりしていた
- 内容がしっかりしていた
- 他分野の研究の話聞くことができ有意義だった
- 神経生物学と糖鎖生物学の分野の人的交流を活発に行うことができた。共同研究を始めるきっかけがいくつかできた。

r. 「博士号取得者がどうやって職を得るのか？ーアカデミア以外の可能性ー」（若手のキャリアパスを考える）

- アカデミアを出て社会で大いに活躍する博士の生の声を聞くことができ、「そういう道もあるのか」と勇気づけられた。
- いろいろなキャリアパスをしている方の話を聞いて、進路の視野が広がった。

s. リソース・技術開発支援拠点 「光技術・ウィルスベクター・大規模脳活動システム」合同チュートリアル

- 企画がタイムリーでかつ、発表内容が斬新であった。また質問時間が十分取っており、ディスカッションがおもしろかった。
- 普段接していない研究課題に対する技術的なアプローチを紹介して頂けたことで新しい研究の可能性についてより具体的に考えることが出来た。
- チュートリアルはいずれも教育的な内容で意義深かった。
- 技術・支援内容の情報が得られた。
- 身近で新しい技術を自分の研究に応用するため。
- ウィルスベクター技術が今後、神経科学の発展において必須の技術になると考えるから。
- 支援拠点の事、全く無知だったので、そういうシステムがある事を知る事ができ勉強になった。
- 様々な技術が開発されている様子を聞くことができ勉強になった
- 技術開発支援がうまくワークしていることが感じられたから

u. リソース・技術開発支援拠点「グリア機能解析」チュートリアル

- 普段接していない研究課題に対する技術的なアプローチを紹介して頂けたことで新しい研究の可能性についてより具体的に考えることが出来た。

v. リソース・技術開発支援拠点「トランスジェニックラット」チュートリアル

- チュートリアルはいずれも教育的な内容で意義深かった。

- 最終日午後のセッションにもかかわらず多くの方が来ていたし、発表内容も面白かった。
- これからトランスジェニックラットを用いたいと考えているので、その長所・短所などが大いに参考になった

w. リソース・技術開発支援拠点「脳画像統合データベース」チュートリアル 死後脳研究

- これからその分野の技術を初めて使う人間にとって非常によい入門となった。また、チュートリアルの中に実習が含まれているのが非常に良かった。

その他

- 日頃あまり聞けない話だが自分の専門とする領域との関係性が垣間見えて非常に興味深かった。
- 全て＝シンポジウム形式なので、まとまった話を聞いたことです。
- 先端の技術と考え方に出会いことから。
- 新しい技術動向と支援の様子がよくわかった。
- 周辺領域や他分野の動向・最新成果・方向性を知ることができ、大変有意義であった。
- 実のある議論がなされた。
- 今後の脳科学の方向性を考えていく上で勉強になった
- 研究を進める上で、情報を得られた。
- 演題タイトル通りの情報が得られたから。
- その分野の素人でもよく分かる発表内容で、とても勉強になったし、その分野に興味を持てたため。

質問 14：参加したイベントに対する要望や意見がありましたら、イベント名を a-w で指定した上で記入をお願いします。

g. 包括脳企画「脳研究推進の仕組みを考える」

- パネルディスカッションは特に日本では盛り上がりにくいです。聴衆が発言しはじめた頃には終了です。これには、司会の技術が重要で、高名な先生といえども、司会業は今一でした。研究とは別の技術だと思います。事前に発言希望者からの意見を文書で募り、それを予め紹介しつつ進めては如何でしょうか。
- 文科省からお金を貰うためのアピールになっているのが露骨すぎると思った。税金経由ではなく、産学連携や寄付の募集など、民間や一般市民からのダイレクトな支援も模索した方がよいのではないかと思った。
- 若手研究者にとっては余り興味を引くものではなかったと思われる。既に大型予算を獲得している方々のお話が多く、零細企業的な研究室に所属している者にとっては、ほとんど参考にならない。逆に若手の自由な意見を聞く場を設けた方が良いのではないか。

k. 脳と心のメカニズム第 13 回 夏のワークショップ

- 実験家に理論的な結果を話させるとつまらないのでやめた方がよいと思う。Chklovskii も（彼は理論家だが）新奇性のない話をしていて、こういう講演をお願いするという要望の出し方に問題があったのではないかと思われる。

m.包括脳・脳プロ合同企画 「神経科学研究の未来－基礎研究と臨床研究をどのように連携して進めるか？」

- 若手や一般研究者（普通に不遇な研究者）のパネリストにも登壇させるべき。登壇していた高名な研究者は研究環境やポジションに恵まれすぎていて、実態がよく把握できていない可能性がある。コミュニティの大多数の研究者は、若手や一般研究者（普通に不遇な研究者）であり、それらの研究者が日本の研究を支えていると考えられる。
- パネルディスカッションは特に日本では盛り上がりにくい。聴衆が発言しはじめた頃には終了です。これには、司会の技術が重要で、高名な先生といえども、司会業は今一でした。研究とは別の技術だと思います。事前に発言希望者からの意見を文書で募り、それを予め紹介しつつ進めては如何でしょうか。
- 若手研究者にとっては余り興味を引くものではなかったと思われる。既に大型予算を獲得している方々のお話が多く、零細企業的な研究室に所属している者にとっては、ほとんど参考にならない。逆に若手の自由な意見を聞く場を設けた方が良いのではないか。

n.公募ポスター発表

- 公募ポスター発表について ポスター発表には興味深いものが多く、有意義であった。しかし、新学術領域の計画班員の方の多くが、参加されていなかった（会場で見かけなかった）か、ポスターを見ずに立ち話をされていた。私はポスター発表の時間に計画班員の方と議論できることを期待していたので、非常に残念であった。計画班員の方が多忙であることは承知しているが、公募班員の研究には興味がないように感じた。計画班員はきちんと公募班員のポスターを見て議論して欲しいと思う。
- ポスター数に対して発表時間が短い。2日間くらい張り続けて、コアタイム以外にも議論ができることが望ましい。
- ポスター間が狭く、混雑していて説明を聞くのが難しいことがしばしばあった。是非改善していただきたい。
- ポスター会場の通路幅がもう少し広いとありがたい
- もう少し時間が欲しい

o.懇親会

- 優秀発表賞は、各自の研究を 30 秒程度でアピールしてもらっても良かったと思う。

r.「博士号取得者がどうやって職を得るのか？－アカデミア以外の可能性－」（若手のキャリアパスを考える）

- 教員がいると一番聞きたい質問をしにくい。

- 手向きのイベントは包括脳として重要な位置づけと考える。しかし、最終日であったこと（お金の都合上、前日までに帰った学生を何人か知っている）と、他の重要なリソース関連のチュートリアルが重なっていたことが一因となり、参加人数が極めて少なかった。日程に関しては、改善の余地があるのではないかと感じた。

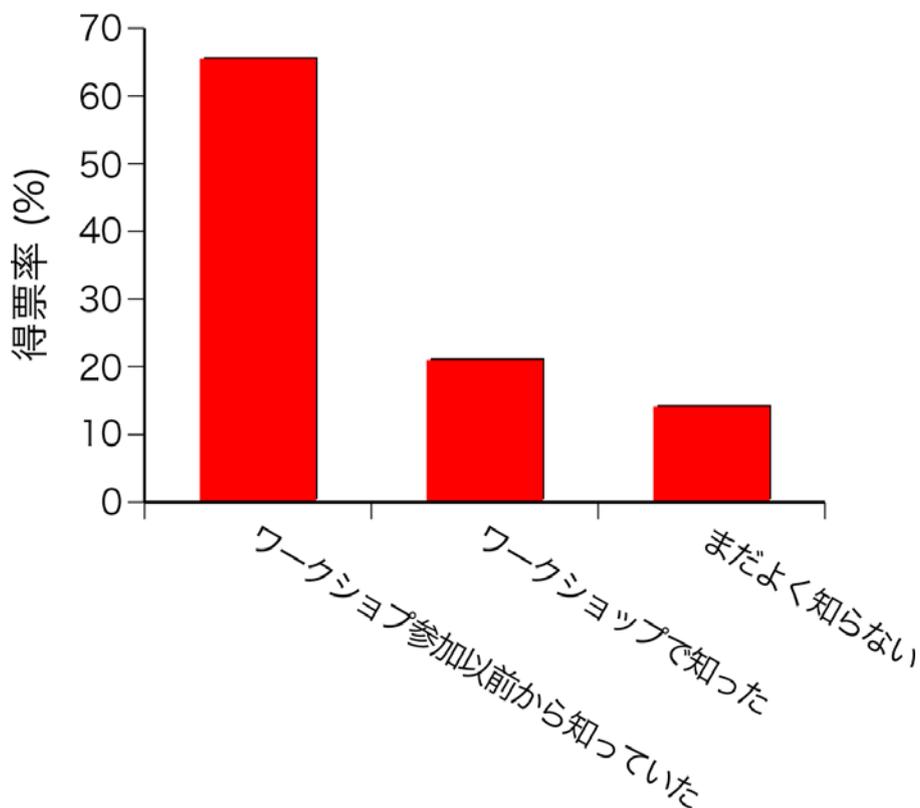
s.リソース・技術開発支援拠点 「光技術・ウィルスペクター・大規模脳活動システム」合同チュートリアル

- 短い時間の中でプレゼンターの発表内容が良くまとまっていた。

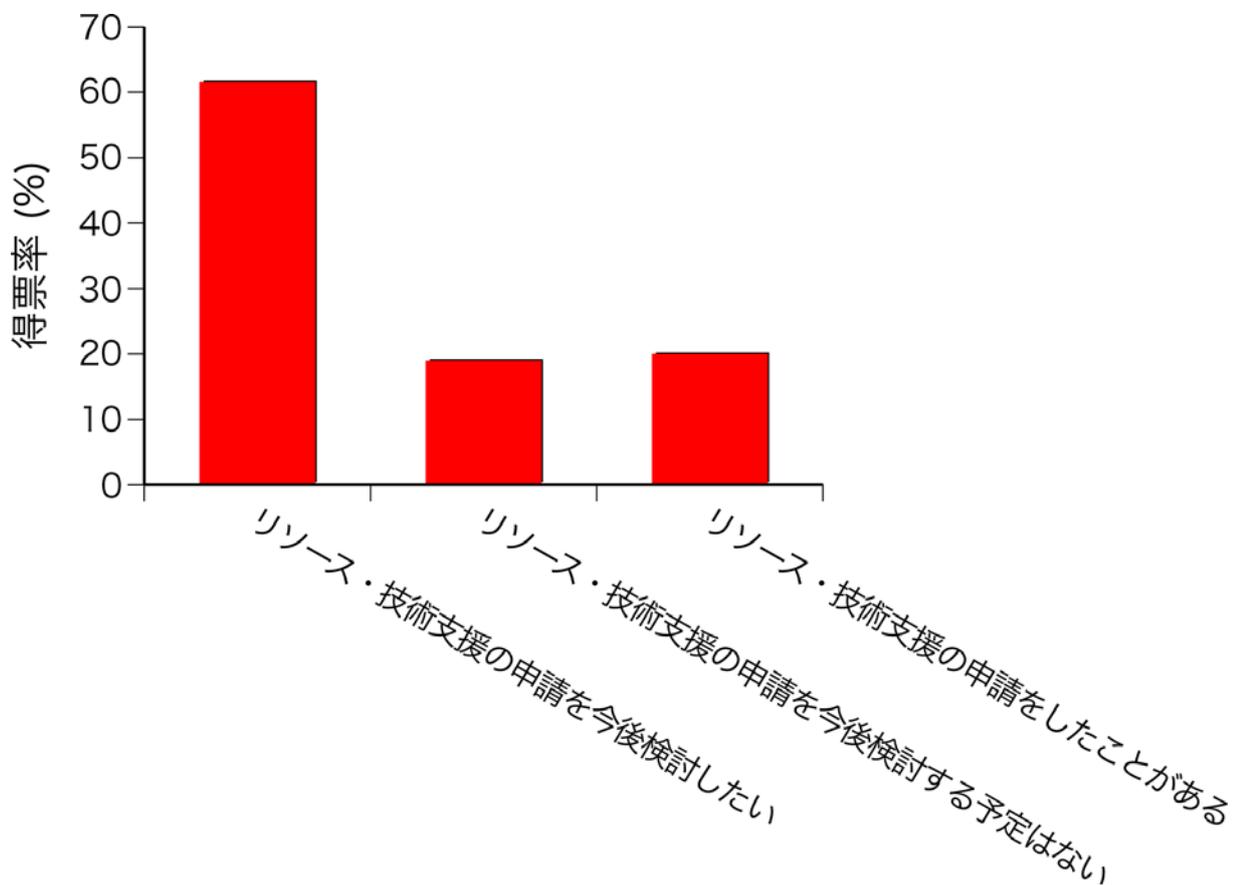
その他

- 特にありませんが、班会議を公開する必要性を必ずしも感じません。参加自由の公開とすると不特定多数の聴衆を想定しなくてはならず、どうしても発表内容や議論が浅薄になるように思います。
- 著名な先生方の姿もたくさん見かけたし、その先生方から少しでも多くの事を学びたいと思って集まった若手も多かったのに、講演セッションが班会議であったり各領域の報告会が殆どで、関係者とそうではない人達にとっての参加に対するモチベーションに差があるように思えた。何かを学びたいと思っている若手にとっては、何となく蚊帳の外にいるような感覚を覚えた。せっかく多くの著名な先生方がいるのだから、懇親会とは別に、若手がより多くの著名な先生方と交流できるような気軽なセッションがあると嬉しいし参加しやすいと思う。
- 身内だけの会であった頃とは異なり、現在はトップダウンのグラントの情報がやり取りされたり、政策に訴える会となっています。日本人以外の研究者にも公平に門出を開く為、英語で行なうべきです。
- 午前中の内容は大変充実しておりましたが、午後の内容をより興味を持てる内容で充実させ、より夕方遅めまで詰め込めば、より短期間滞在で済んだのではないかと思いました。
- 興味深い内容が、複数の会場で並行して行われていたので改善して欲しい。
- もう少しポスター発表の時間を長くしたらどうか

質問 15 : 包括脳ネットワーク総括支援およびリソース・技術支援活動に関してお答え下さい。



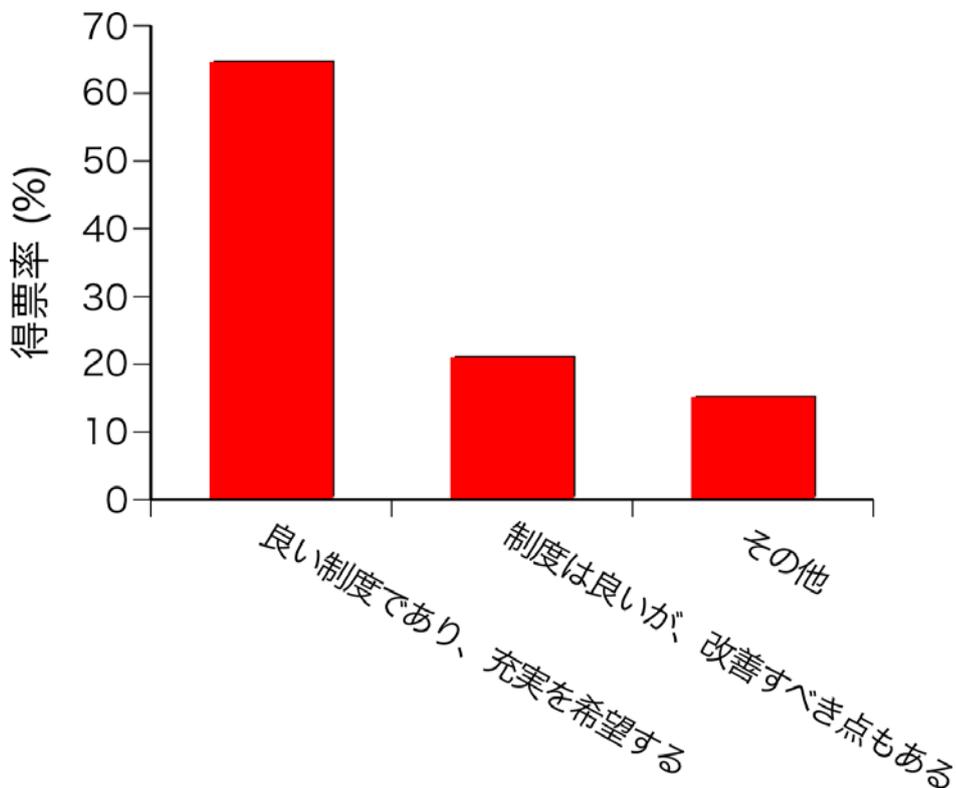
質問 16 : 包括脳ネットワークのリソース・技術支援活動に関してお答え下さい。



質問 17：包括脳ネットワーク総括支援およびリソース・技術支援活動に関して何かご意見・ご感想があればご記入下さい。

- 非常に良い、すぐれた、意義の深い事業だと思いますので、是非、継続していただきたいと思えます。
- 発表等の際に、関連研究者が何を提供できるか具体的に広報して下さることが大切です。
- 特にありません。
- 大変良い制度だと思う。
- 重要な活動でさらに充実していくべきである
- 受け入れ側が研究者なので、実際には、知り合い研究者同士の共同研究を加速するという事であると、うわさがあるが、やはりそうなんだろうなと思った。
- 種々の活動ご苦労様です。神経科学学会年会で教育シンポジウムが始まりましたが、包括脳でも教育的なリソースがあるとうれしいです。分野が違くと初歩的なことがわかってないことが多いです。
- 支援活動の幅を広げて欲しいことと、その内容をより広く告知して欲しい。
- 支援を行っている拠点と開発に重点を置いており、支援をあまり行っていない拠点とに差があるように思える。支援を充実させるためには開発するための研究費は必要であり、支援を多く行っている拠点には開発費も充実させるべきだと思う。逆に支援に至らない技術の開発は他の研究費で行うべきだと思います。
- 今回のイベントに参加する機会があつて初めて詳しくしることができた。以前からホームページなどで記載されているとのことであつたが いろんな機会でもっと情報を発信してほしい。
- リソース・技術支援は本ネットワーク事業のコアになるものであるもので、是非拡充して進めてもらいたい。
- この種の活動を増やすことによって、貴重な研究費という資源がより有効に活用されるようになるべき。実際に支援をあまり（あるいはほとんど）していない支援グループがあるようである。実態を数値的に精査し可視化して（例えば、ミドルオーサーの論文が何報出ているかについての定量的数値は、支援の客観的指標になる）、ニーズの多いとおもわれる支援グループや新規のグループに研究費をより重点的に重み付けして配分すべきであろう。

質問18：「若手優秀発表賞」についてお答え下さい。



質問19：「若手優秀発表賞」についてのご意見がありましたらご記入下さい。

- 表彰者をも少し絞って、1人あたりへの奨励費や正式な表彰式などを開催して欲しい。
- 発表者に対して受賞者が多すぎるため、賞の質が疑われる。安売りすべきでない。
- 発表時間をもっと長く取った方が多くのポスターを見ることが可能
- 特になし
- 特にありません。
- 審査委員の数を増やしてほしい。若手賞でポスター前にずっといなければならないため、交代制にして他の発表を見に行く時間を作ってほしい。
- 若手の定義は学位をとってから何年以内（例えば5-6年）とするのが適当。でないと、多くの医学系の研究者は不利。
- 若手のポスターを審査して表彰する制度に改善する余地があると思う。各個人の努力や実際の成果が正当に評価されているとは思えなかった。少なくとも、学生、ポスドク、助教以上は分けて評価すべきではないか？学生は自分のデータ（所属ラボで以前または他人に出されたデータを除いて）で評価されるべきだし、助教であれば、指導する学生や技術員のデータを加えて発表し評価されるのが自然だと思う。
- 実際にポスターを審査している様子が何えなかった。過去の業績にとらわれず、純粹にポスターの内容、発表者の資質を審査すべきではないか。

- 懇親会には若手はほとんど来ていないので発表してもいないものが多い。あらかじめ賞を知らせておいたほうがいいのかもかもしれません。 選考される人数はもっと絞ってもいいと思います
- 懇親会での受賞者発表は、もっと注目を集めるような工夫が必要と思った。
- 研究は論文を書いてなんぼのものなので、ポスター発表レベルで表彰などすることには疑問がある。
- 業績を考慮してということだったが審査の基準が不明瞭であるように感じた。
- まず、審査基準を知りたいと思います。 次に、インパクトファクター偏重の基準であるならば、それを改正した方が良くと思います。
- ポスター発表を評価したものなのでしょうか？
- ネットでの投票などを用いると面白いだろう。
- アナウンスが何をいつしているかわからなかった。 アルコールのはいっていない状況で授賞式を行うべき。 どの研究が受賞したか、けっきょくわからなかった。

質問20：来年の企画に向けて、イベントの改善すべき点がありましたら、ご意見をお聞かせください。

- 特にありません。
- 地方開催では参加が大変になり、参加者も減りますので、常に大都市での開催を希望します。
- 質問14への回答に含まれた内容です。
- 懇親会の費用が高すぎて残念ながら参加できなかった。
- 懇親会の会費が高い。若手の助教やポスドクには払えない額である。このような会にも公的な資金を多少は使えるような（その分、参加費を減額する）制度が望ましいと思う。
- 研究室のメンバーを多く連れて行くためにも、旅費ができるだけ少なくてすむ場所での開催を望みます。関東や関西(神戸)がいいのではないのでしょうか。例えば、東北や北海道に4名で行くだけでも、50万円近い科研費が必要です。新学術領域の公募班の科研費が200数十万円のため、その1/4近くを旅費で使用することになります。そのお金があるのであれば、実際の研究費としてもっと多くの研究室にサポートしてもらいたいです。
- 会場の天井が低く、後ろからスライドを見るのに苦労したので、改善すべき（例えば階段式の会場、または段のある会場）。 並行したイベントを減らして、期間を長くする
- 何時に、どのセッション会場で、誰が、どの演題名で発表するのか、に関する情報公開を少なくとも2ヶ月前に、ホームページ等でしてほしい。今回、開催6日前（17日）の公開であったため、出張計画は、出張の数日前になるまでたてる事ができなかった。最初は、自分が探さなかったのかと思い、事務所に確認したところ、上記の通りである事がわかり愕然とした。
- ポスター間が狭く、混雑していて説明を聞くのが難しいことがしばしばあった。是非改善していただきたい。
- アクセスのよい会場にして欲しい。会場近辺に食事するところがほとんどなく、また昼休みも短いためお弁当以外の選択肢がほとんどなかった。これは事前にアナウンスがあった方がよかったと思う。このような場合は業者に依頼して当日販売も初日から行って欲しい。
- 「脳研究推進の仕組み」ワークショップは毎年実施してほしいと思っています。

- 「神経科学研究の未来－基礎研究と臨床研究をどのように連携して進めるか？」や、「博士号取得者がどうやって職を得るのか？－アカデミア以外の可能性－」などの研究そのものについてではないイベントを大幅に増やし、コミュニティ内での議論を活発に行うことが望ましいのではないかと。研究そのものについてであれば、普通の学会を中心にすればよいのではないかと。

質問 2 1 : 来年の企画に向けて、具体的なイベント企画案がありましたら、ご意見をお聞かせください。

- 特にありません。
- 質問 14 への回答に含まれた内容です。
- 海外での脳研究へのサポート体制と戦略について、国別に統括者を数名招聘し、紹介してほしい。
- 「神経科学コミュニティでコヒーレント・ボイスを集約するにはどうすればよいか？」というようなイベント。

質問 2 2 : 夏のワークショップのオーガナイズ全般について、何かご意見・ご感想があればご記入下さい。

- 特にありません。
- 通して参加する人は少なかったのでは？ポスターの前は人が閑散としていた。
- 大変良かったと思います。 木村先生のご尽力にも感謝します。
- 全体の期間が少し長すぎるので、全日程に参加するのが難しい。
- 初めての参加でわからないことが多かったけれども、知らないことが多く勉強になりました。
- 館内無線 LAN が使えないことが不便だった
- 開催期間について、大学の教育（学生実習等）の期間と重ならないように、多くの会員の都合を調査してから決めてほしいと思います。
- とても充実していたと思う。
- とても興味深い内容でしたので今後とも何卒継続して頂きたいと存じます。

質問 2 3 : 来年のワークショップのプレナリーレクチャーの人選・内容について、何かご意見がありましたらお聞かせください。

- 特にありません。
- ワークショップ企画の時期に、再度、プレナリーレクチャーの人選・内容についての希望のアンケートをとるのがよいのではないかと。

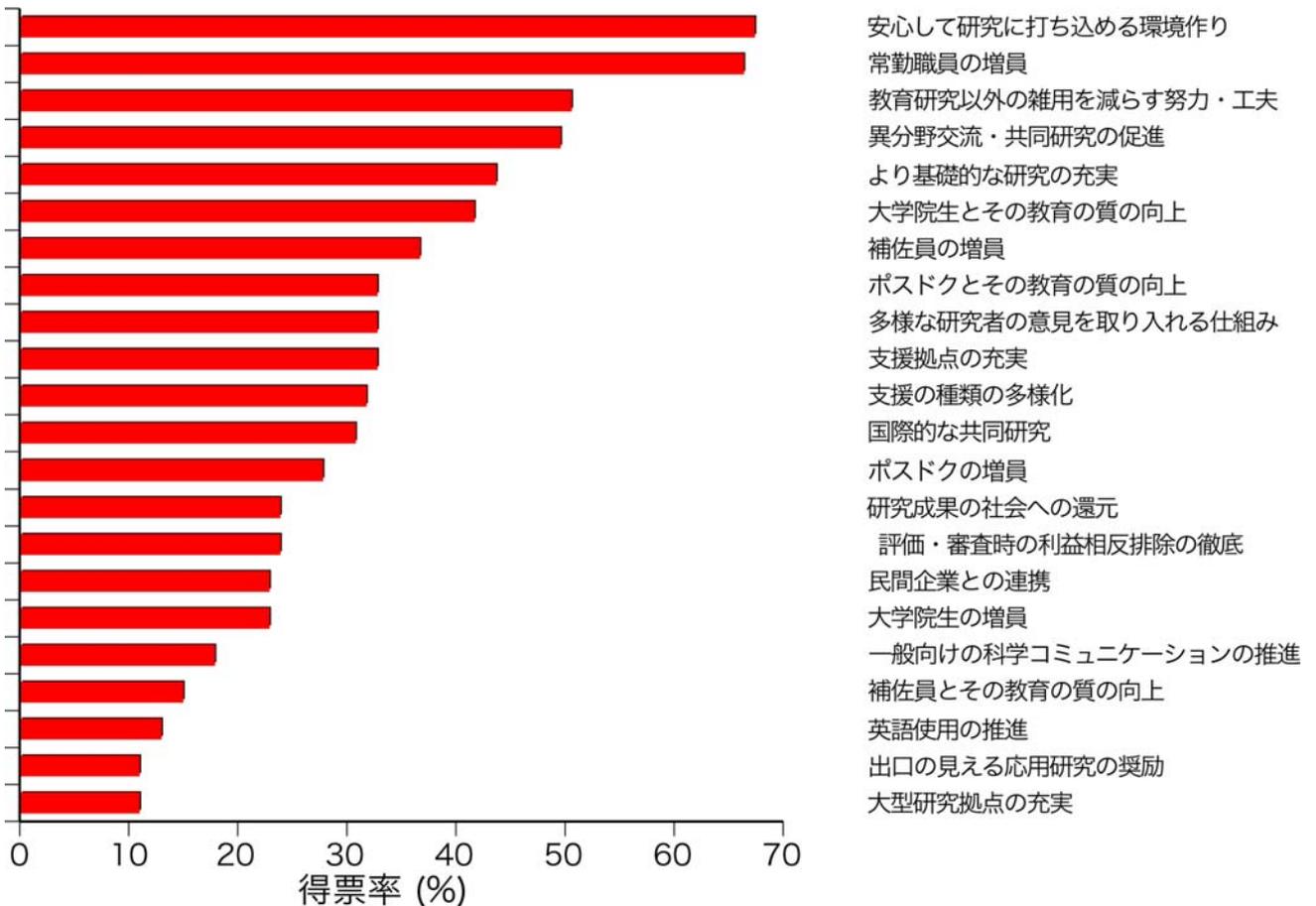
質問 2 4 : 包括脳ネットワークホームページに関して、何かご意見・ご感想があればご記入下さい。

- 目的とする項目にたどり着く（たとえば、今回の夏のワークショップ）のが簡単ではない。もう少し、簡単にならない物かと思う。例えば、大きなイベントに関してのみ、バナーを貼って、そ

のイベントのみのページに飛ぶとか、、、、。

- 日程表のページから、各セッションの web サイトへのリンクを拡充してほしい。
- 特にありません。
- 少し見づらい気がします。 もう少しすっきりなると嬉しいです。 管理の方のご努力には感謝していますが。
- シンプルで見やすいと思う。

質問 2 5 : 脳科学研究をこれから更に推進するために必要な要素はどれでしょうか (複数回答可 ; 必要と思われるものすべてを選択してください)



質問 2 6 : 脳科学研究の将来の発展に重要と思われる要素について自由にご意見をお書きください

- 評価・審査時の利益相反排除の徹底
- 脳科学を医学的応用ばかりでなく、教育や工学などにもしっかりと生かしていく方向性を打ち出すことが裾野を広げるためにも重要であろう。 かとって、コモダイズムに乗りすぎると、エセ科学のレッテルを張られる危険性もあるので、地に足の着いた進め方を願いたい。
- 脳プロの活動を紹介する企画で、欧米と差別化を意識した日本の戦略 (霊長類など) や、共同研究による Nature が 2 本が、自画自賛的に賞賛されましたが、違和感を憶えました。 30 億円で Nature が 2 本というコストパフォーマンスの問題に加えて、上層部のこの取組みで、果たして日本脳科学から、iPS 細胞や光遺伝学に相当するような革新的な技術開発や新研究が、生まれ得る

かどうか、それを目指しているのかどうか、危惧されました。それが生まれるような土壌の形成や啓蒙を、どうかお願いできないでしょうか。

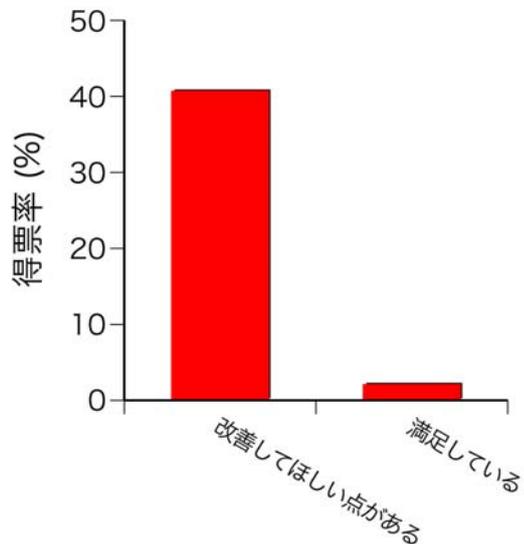
- 日本の脳神経科学者コミュニティがガラパゴス化しないようにすることが大事と思われます。そのために国際的なコミュニティの中で、日本の脳神経科学者が今以上に存在感を示し役割を果たし、中心に食い込んで行く必要があるかと考えます。北米や欧州など海外の日本人科学者コミュニティに日本と海外のそれぞれのコミュニティの「橋渡し」として機能してもらうような体制があってもよいのかもしれませんが。
- 特にありません。
- 長期的な視点で評価して欲しい
- 多くの領域をアクティブにする事が肝要かと思えます。日本の過去の歴史を振り返るに、ある特定の分野が中心となり、神経科学を引っ張る傾向があるようです。そうすると、その特定分野に人が多く集まり、それ以外のサイドの分野はお金も人材も極端に矮小化する傾向があると見受けます。サイドの分野にもある程度サポートするような制度も必要でしょう。
- 神経回路だけでなく、グリアも含めた回路研究 脳内にはグリアの方が多いのだから。
- 神経科学に特化した大学院の、さらなる設置。他の生物分野も含めた公平性の高い日本発の科学雑誌を作り、神経科学のセクションを設定する。
- 常勤職員枠の増加 若手の交流機会の増加 研究費支援の補強
- 子供たちへの科学の充実。実験のデータから論理的に物事を考えることができる人材の育成（大学の指導教官がしっかりと教育することと教育ができる環境を整えること）。専門分野での実験を行ってきた経験をもたない（指導能力がない）指導教官を教育機関から排除する仕組みを作る。実験補助、実験助手の充実。特に育児休暇などでいったん職を辞めた人の復帰制度充実。多様なポジションを作成してほしい。
- 今回のシンポジウムでもそうであったが、「脳研究をどうするか」「いかに脳研究にお金を集めるか」という議論は 現在の日本の状況を考えるに大変 つまらない感覚であると思えます。がん研究や ほかの領域の研究と いかに手を携えて 日本全体の底上げをするかが重要だと思えます。決して 脳研究がすばらしいわけではなく 全体を見渡すこと、今の国内窮状を研究者がいかに広く考え連携してゆくかが 大切だと思えます。その点ではこの質問もそうですがシンポジウムにもがっかりしました。
- 国レベルで研究費が不足しており、効率的な研究費補助、大学や施設の壁を取り払った研究協力体制をととのえる必要がある。また、企業から人的、資金的補助を得られるよう努力することも考慮すべき。米国のハワードフューズのような組織の設立。神経科学、脳科学専攻の大学院の拡充。
- 現在、世界的に、生命科学分野の研究者が増えたため、研究機関のパーマネントのポストが足りなく、15年前でしたら、大規模大学で研究室をもてるほどの業績をもつ人が、地方の国立大や中規模の私立大で研究室をもっているのが現状です。業績をあげるポテンシャルは十分にあるのですが、地方大学などの公費は年間20万円以下の所もあり、そのなかから電気代を捻出し、1円も残らず、自身の給与から研究費を出している人も多いです。そのような研究者には、50~100万円の科研費でも天からの恵みです。その一方で、大型研究費をもつ大講座の一部では、年度末に

経費が余り、残金を 0 にするために数 100 万円の顕微鏡を毎年購入し、特定の部屋にそれらがずらりと並び、使われていない状態の所もあります。また、業績のでないポストドクが、行き先がないため、何年もそれらの経費で雇用されていることもあります。経理上でも、経費をプールして、助成者が自由に研究費を使えないのが現実です。そのような研究室における 100 万円は、それがなくても研究室が成り立ちます。しかし、経費のない独立した研究者には 100 万円がすべてです。しかし、そのような研究室からも、確率の問題で大きな発見が生まれます。その両方をよく存じ上げております。講座制の歴史がありますので、すぐには改善しないと思いますが、業績を評価したうえで、特に、独立した研究室を主催しているひとに広く助成して頂ければさいわいです。そのようにすることにより、研究室に所属している学生も研究ができるようになり生かされます、少子化で学生数もアカデミックポストも減少して行きますので、そのなかで神経科学の裾野を広げるためには、神経科学の研究を行なっているできるだけ多くのラボが最低限の研究を行える環境を整えるべきです。

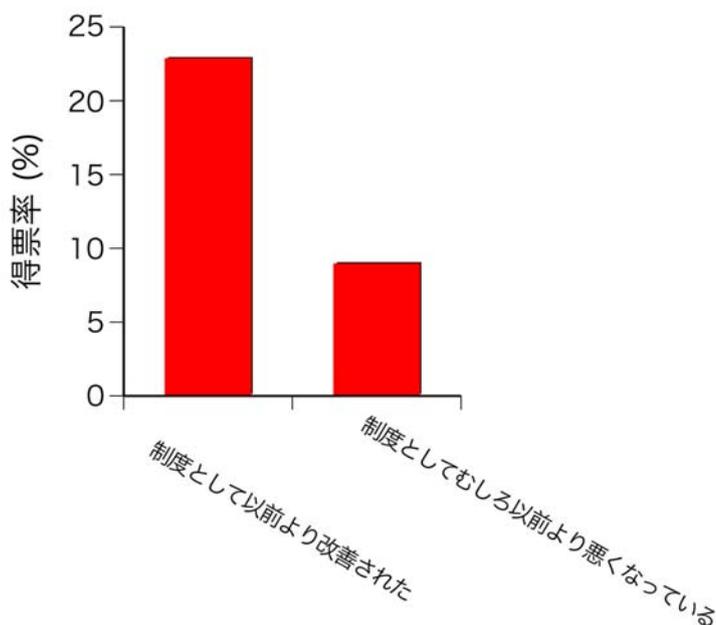
- 基礎と臨床を繋げる臨床治験コーディネーターのサービスを拡充してほしい
- 学部生の教育です。上記の選択肢の中に、学部生教育がないのはなぜでしょうか？一部の有力大学や研究所の方が学部教育に興味が無く、ラボ配属以降の学生だけを重要視しているのが残念です。
- 学部再編による神経科学部の設立・拡大、および初等・中等教育における脳科学教育の推進。脳科学研究の成果の広範な応用により、社会における脳科学の専門知識・技術の需要を増大。脳科学の未来像の明確化と、それに伴う倫理問題の先取りの議論による解消。
- 各研究機関で特色のあるコアラボラトリーのような施設を作り、その研究機関全体で得られた間接経費などの資金により常勤のポストを作ること。正規の定員の枠は増やせないと思われるが、各研究機関でそれに準じるポストを作る努力をしていかなければならないと思う。
- 一般社会への脳科学の重要性（薬や病気の治療も大事ですが、科学としての脳科学の重要性）を訴えることが特に重要と思います。そのときに、無機質な研究成果だけでなく、研究者の凄さを伝えることも大事だと思います。たとえば、文学では、作品は読んだことがなくても、名前やエピソードを知っている作家というのはいっぱいいます。その前に、研究者が人生をかけて、世界に通用する研究を目指していることが必要ですが。
- ポストドクの雇用を可能にする規模の資金枠を増やしてほしい。
- どれだけ素晴らしい機器を揃えても、結局“人”がいなければ将来の発展は望めないと思います。

質問 27 : 脳科学研究のための競争的資金の在り方についてお答え下さい (複数回答可 ; 該当すると思われるものすべてを選択してください)

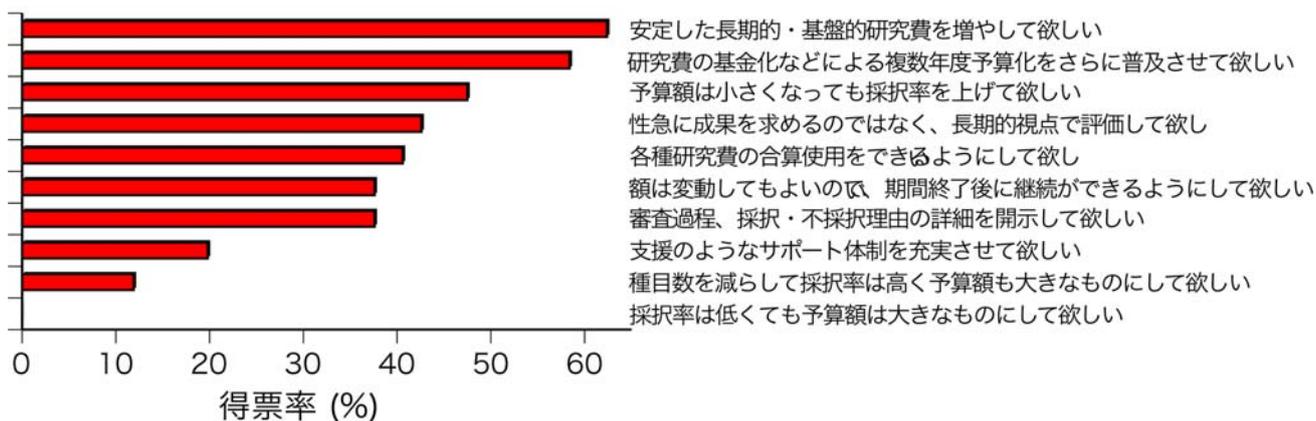
1) 競争的資金の現状について



2) 制度に対する評価



3) 制度に対する要望



質問 28：脳科学研究のための現在の競争的資金の在り方について、自由にご意見をお書きください。

- 予算配分が縮小しても中長期的な研究支援を可能にする枠組みを検討してほしいです。複数年度予算化は年度末の無駄な買い物を防ぐ上でも導入されるべきです。
- 本当に公平な競争であるべき
- 特にありません。
- 大型科研費を持つ研究室では、年度末に経費が余ることがおおい。一方、年に 100 万円でもいいから経費がほしい研究室もある。神経科学の裾野を広げるためにも、小額でも採択数を増やしてもらいたい。また、独立したラボ単位で研究費を見てもらいたい、ビッグラボの助教や准教授は履歴書の業績のために大型科研費をとっているが、実際はその経費が無くても、ボスの研究費で研究ができています。実際にある話ですが、ビッグラボの助教が「さきがけ」に採択されて、すでにラボに経費が余っていて買うものが無いので、500 万円の CCD カメラ数台を購入して、使用せずにデシケーターにいれて保存している事実がある。小さくても、独立したラボの PI に裾野を広げた援助をお願いしたい。
- 大型プロジェクトの企画・提案の段階で、オープンに一般研究者の意見も聴取して欲しい。NIH の RO1 のような 1 つだけあれば研究ができるような基盤的研究用のグラントを創設して欲しい。
- 多様な資金の募集制度をさらに充実してほしい。
- 審査委員の COI の徹底、若手の活用 複数年度予算の徹底
- 主流あるいは流行の研究以外にも予算を配分すべきだ。
- 若手の成長を阻害するような応募制限などはやめて欲しい。特に科研費の若手 A と若手 B は金額と採択率が大きく違うのでポストクや助教時代には B に応募することが多くなるが、その後に業績を出しても回数制限により若手 A に応募出来なくなってしまう。現状では A と B では明らかに応募者層が異なるので、応募回数制限をもうけるのであればそれぞれについて制限を設けるべきであり、一緒に制限するのはおかしい。また、現在、CREST や さきがけ などでは脳科学分野の領域がなくなってしまうので関連領域ができるように働きかけをして欲しい。
- 執行ルールが研究機関ごとに異なり、しばしば融通が利かないという事態を改善して欲しい。
- 現在、評価する評価員の氏名は公表されていません（数年後に公表）が、これは、その年にだれが評価にあたるかを公開するのが好ましいと考えます。
- 現行の「若手」は 40 歳までが定義となっていますが、ポスト不足と博士あまりの影響で、40 歳オーバーでもポストクや助教などで「これから研究をはじめ」研究者の数が増えているものと考えられます。これら「准若手」のための枠が、新たに検討されればと思います。「年齢に関係ないスタートアップ」などでもよいかもしれません。
- 継続的な研究費獲得のための制度の確立。研究費最終年度はいつも、翌年度の研究費が取れるかどうか分からないという不安定な状況に置かれるので、最終年度よりも前の年から研究費申請ができるようにして、重複期間を許容することで、次年度以降の研究費の確保状況への不安の解消を図る。
- 基礎研究に手厚く配分しないと日本の将来は無い
- 学振の PD の採択率を 30% 程度に上げていただきたい。優秀な若手研究者はボスに雇用されるのではなく、自分で自分自身の人件費をまかなうことにより、はじめて自由に研究することが可能

となり、才能を伸ばすことができます。研究室への競争的資金（特に3年程度のもの）で研究者を雇用することは、研究室にとっても若手研究者にとってもストレスが大きく弊害が多いと感じます。

- 科研費等の競争的資金でポストクの雇用を可能にする規模の資金枠を増やしてほしい。科研費等を3年ではなく、最低4－5年の補助期間が必要。科研費申請を実質的に年2回以上申請できるようにしてほしい。
- 異なる評価軸による採否の判断が必要
- ちょっと資金が集中しすぎの感がある。本質的に必要なのは、潤沢「すぎる」資金ではなく、フレキシブルな制度や研究者間のコミュニケーションの促進であるように思う。
- かつては脳科学の予算はいつも特定のところだけに厚く配分され、新規参入や若手のチャレンジの機会が皆無に近いという印象が強かった。包括脳はそのような流れを変えるものとして一定の効果を出していると思います。
- Big ラボ、研究施設以外に予算を分配する逆進性の補助金のシステムも構築してほしい